

〔東京桑野会〕

令和の東京桑野会は

芳賀 雅美

(八十六期)



昨年の会報にも執筆させていただき、連続して機会を得られたことに感謝と御礼を申し上げます。

天皇陛下の御代が替わり

改元し、新しい時代を迎えた。令和時代の安積高校を取り巻く環境はいかに変わるのだろうか。また東京桑野会についての展望を考えていく。

この8月末で非常勤の仕事も退き、完全なる年金生活者となった。ボケると家族が困るので、スポーツジムに通いだし週5日は2時間程度の汗を流している。またボランティアで得意分野の仕事（IT関連）を引き受け、手弁当で参加し、新しい友人達とも出会えた。娘に二人目の子供が誕生し今度は女兒、孫も増えたがジイジが抱くと大泣きしてしまったため、もっぱらコミュニケーションの改善に努力している。

この5月の改元は上皇陛下の退位による御代替わりであり、たいへんおめでたいことと国民

の多くに祝福された。令和の新時代に希望と期待と共に、新しい風を巻き起こすであろう今上天皇陛下のご活躍を見守っていききたいと思う。

昭和という時代は、何と言っても太平洋戦争

敗戦後の復興と高度成長期の経験にある。私が安積に入学した1970年4月は、大阪万博の開催に湧く一方、赤軍派による日本航空機『よど号』ハイジャック事件のさなかだった。その後大学進学を経て社会人となり、バブルによる異常な好景気をまともに受けて、がむしゃらに働いた。残業に残業を続けて、まさに24時間勤務の世界だった。その途中で世は突如として平成を迎えたのである。激動の昭和時代と言える中で、多感な青春時代・青年時代を過ごした。平成に入ると、バブルの崩壊に始まり大手都市銀行の倒産、大手証券会社の破綻をはじめ経済崩壊とその後の長い不景気に国民が苦しんだ。雲仙・普賢岳火砕流や阪神淡路大地震に始まり、断続的に来襲する天然災害が追い打ちをかけ、あの1万8千人以上が犠牲となった東日本大震災につながっていく。今もなお福島県は、原発事故の後遺症に苦しんでいる。昭和の遺産を維持するどころか、人口の減少、経済成長の停滞、社会格差と分断、少子高齢化による歪構造の顕在化、出口の見えない震災復興、マイナスイメー

ジが定着した。そして世は令和の時代を迎えたのである。令和の幕開けに国民は希望と期待を込めて、歓迎の気分浸っているが、現実はどうなるのだろうか。

母校安積高校は百三十五周年を迎えた。今年度の大学進学状況は大きく躍進し、国公立高難易度大学や私立有名大学の合格数が増えたことは喜ばしい。一方で少子化に伴い、現行の1学年8クラス構成は近い将来6クラスにまで減ることは確実で、既に福島・磐城・安積黎明は来年の募集が7クラス、会津・白河に至っては6クラスである。生徒数の維持には各校ともに苦慮している状況である。

安積高校は2019年度に再びSSH（スーパーサイエンスハイスクール）に指定された。2002年の指定以来、2回目である。文科省からの補助を受け、高校生の学習指導要領のレベルを超えた高い理数系教育を受けられる機会を再び得ることになった。前回のSSHでは、東京桑野会から理数系の各分野で最前線の活躍をしている安積OBにお願いし、後輩達へSSH特別講義を受け持った実績がある。今回も要望があれば、当会にて対応する準備を進めたい。令和の新しい時代にふさわしい、高度な理数科教育のお手伝いができるものと確信する。



特別講演をする、影山任佐博士（79期）

本年6月7日金曜日、目白のホテル椿山荘東京にて、令和元年度の東京桑野会定期総会と懇親会が開催された。郡山からのご来賓として、母校校長の小島稔氏（新任）、校内幹事の染谷伸宣氏（百五期）、安積桑野会会長の安孫子健一氏（八十期）、安積歴史博物館の橋本文典氏（八十四期）の四名をお迎えし、学生会員六名と一般会員百十七名の、合わせて百二十七名が集まった。総会では恒例により、古川清会長（六十三期）による挨拶があり、近年における世界の政治経済状況に憂える発言があり、米中関係や北朝鮮問題、イランを始めとする中東地



懇親会にて、新任の小島稔学校長よりご挨拶

域の紛争が取り上げられた。御年八十七歳を迎えても、益々の血気盛んなご様子に当学会長としてまだまだ活躍していただきたいと感じた。総会後の懇親会に入る前に、恒例により会員の特別講演会があった。講師は東京工業大学名誉教授で、日本犯罪学会前理事長・医学博士の影山任佐氏（七十九期）による『精神医学と犯罪学の狭間で―人間学を求めて―』と題する講演である。アルコール酩酊による犯罪について、科学的なデータに基づく分類と精神医学理論の確立や、現代若者の心理と行動について、国際比較をし

ながら犯罪と非行の類型と背景考察を加える手法の紹介など、精神科医師としての観点から犯罪学や統合人間学を分かり易く紐解いた内容であった。
引き続きお待ちかねの懇親会である。開宴一番に高松ゆたか副会長の挨拶後、来賓の学校長と安積桑野会会長、安積歴史博物館常任理事のご挨拶を賜った。出席者を代表して菅野壽夫氏（六十三期）による乾杯の音頭で楽しい宴会が始まった。通常国会開催中のたいへんお忙しい中、根本匠厚生労働大臣（八十二期）も駆けつけ、飛び入りのご挨拶を賜り、宴もたけなわ、



根本匠厚生労働大臣(82期)による飛び入りのご挨拶



懇親会にて、自己紹介する若手会員

グラスを片手に旧友たちを回り再会を喜びあい、また世代を超えての懇親に旧交を温めあった。

これまた恒例となった若手会員の自己紹介があり、百十八期以降の12名が登壇した。この春に安積を卒業した新入会員3名も含まれている。声掛けをしていただいた、元PTA会長の吉田雅彦氏（百一期）には深く感謝する。今年度はいつもの大矢真弘応援團長（八十八期）が欠席したため、ニューフェースの久保木史朗応援團



大矢真弘氏に代わって、久保木史朗応援團長(119期)がデビューを果たした

長（百十九期）が指名を受け、東京桑野会デビューを果たした。校歌や紫の旗ゆく所を心置きなく大合唱している内に、時間は予定の2時間を遙かに過ぎ、惜しみつつもお開きとなった。また来年の再会を誓って、三々五々とグループに分かれて二次会へと移動し、いつものことであるが、目白駅前の居酒屋では、例年同様の福島弁が飛び交う宴会が続いていたであろう。

さて昨年はこの場をお借りして、古川会長の不退転の決意を記述した。東京桑野会の活動について『近未来的な開拓を突き進める強い意志』の表明である。残念ながら事務局や広報部会に

おいて、未だ具体策を見いだせないまま一年が無為に過ぎた。不徳の致すところであり、会員の皆様には深くお詫び申し上げる次第だ。早急に広報部会の代替わりを進めると共に、具体的な行動指針と計画の策定に取り組まなければならない。知恵を絞り、また会員の皆様にはぜひご協力を賜りたいと思う。

昨今巷でよく言われる、『地縁血縁の喪失と個人主義の横行』については当会にとっても大きな悩みどころのひとつである。社会悪のようにも思えるが、『地縁血縁』は昭和の経済成長期までの国民性を表しており、当時は世界に追いつけ追い越せの国策でもあった。当然のようにGDP世界第二位にまで追いつくと、歴史は転換期を迎える。良かれ悪しかれ、拡張主義は終わってしまったのだ。郷土愛や企業愛は薄れ、いまや安積という言葉だけで、同郷の同窓生たちを惹き付けることは難しい。かといってこの変革を、ただ指をくわえて見ているわけにもいかず、会員の皆さんの興味を惹き付ける『何か』を見出さなければならないと思う。

宿題は重くなってしまうが、令和の新時代を迎えて、安積桑野会の益々の発展と、会員の皆様のご健勝を祈念し、本稿を終えることにす